メディアは戦争をこれまでどのように伝え
今どのように伝えているか

1A182270-2

野口 駿

[概要]

戦争の記憶の継承において、テレビや新聞などのマスメディアの戦争報道は大きな役割を果たしてきた。８月に入ると、多くの日本人が戦争の記憶を想起するが、こうした慣習は、「８月ジャーナリズム」と形容される、テレビや新聞で展開されるキャンペーン報道による影響が大きいと考えられている。このことからも、マスメディアの報道と戦争の記憶の関係が如何に深いかを推し量ることができる。

しかし、近年インターネットが登場し、テレビや新聞といった従来のマスメディアの相対的な地位は低下している。また、戦後７６年が経ち、戦争の記憶が風化すると共に、戦争に対する関心が社会的に低下してきている。そして、体験世代が減る中で、如何にして、その記憶を次世代に継承していくのか、様々な現場で模索が続けられている。

本稿では、戦後のテレビや新聞の戦争報道が、被害性を前面に押し出した「受難」の語りと、アジア諸国に対する「加害」の語りを中心に展開してきたことを、概観する。そして、近年、戦争の記憶が遠ざかる中で、戦争を「日常」などの切り口から身近に感じられる報道が出現していることを、様々な例から提示する。そして、最後にインターネットメディア「BuzzFeed Japan」の旗智広太記者のインタビューから、ウェブ上での戦争報道の展開と、若い世代に如何にして戦争を伝えていくか、明らかにしていく。